

會學濟經學大國帝都京

叢論濟經

號三第 卷五十第

行發日一月九年一十正大

論叢

マルクス氏の集産主義の實行難を論ず

法學博士 田島 錦治

交通税の本質

法學博士 神戸 正雄

階級に就いて

文學博士 高田 保馬

基督教文明の發展概論

法學博士 財部 靜治

社會哲學に於ての主意的二元論的思想

法學士 恒藤 恭

時論

財産税論

法學博士 小川郷太郎

資料

小作爭議原因の研究

法學博士 戸田 海市

雜錄

フアーガスの本能的社會觀

法學博士 河上 肇

我國の離婚率に就て

經濟學士 岡崎 文規

定價制と正價制

法學博士 河田 嗣郎

雜 錄

フアーガスの本能的社會觀

河 上 肇

グンテルの言つてゐるやうに、『十分なる意圖を以て爲したる行爲より、因果論的には必然的なる、しかも目的論的には全く意圖内に在らざる副産的の結果を生ずるといふ事實の認識は、史的唯物論に向つて、その核心及び本質を特色づけるものである。』茲に十分なる意圖を以て爲したる行爲より、全く意圖内に在らざる副産的の結果を生ずるとは、例へば、労働者が勞賃を得るの目的を以て労働に従事しながら、期せずして筋肉の發達を促すが如き場合のことである。意識された目的は勞賃を得るに在る、さうして労働の結果斯せずして筋肉が發達したといふことは、最初から労働者の意圖内に無かつた副産的の結果である。

人間の行動に關して此の如き現象が生ずるのは、決して不思議なことではない。蓋し一定の人間が或る一定の行動を取ると、そこには複雑な無数の相互的因果關係が展開されるのだが、今其等のものをば、行爲者自身が、その行爲に先だつて、一々豫見し意識し得る筈のものでは無¹⁾いから、如何なる場合にでも、後から見ると、必ず其處に、最初は豫期してゐなかつた若干の結果が、偶然に發生してゐるものである。ところが既に若干の結果が其處に發生したならば、又それが元となつて、將來の行爲に或る新たな動機が成り立ち、從て最初からの目的は變化されて來る。さうして其の新たに成り立つた目的のため更に一定の行動を取ると、其處に重ねて豫期しなかつた結果が生まれ、再び前と同じやうな作用を呈し、斯様にして人間の目的は絶えず其れから其れへと變じて來るので、前後を一貫する不變の目的といふものは成り立ち得ない。ヴントが *Das Princip der Heterogenie der Zwecke* と謂つてゐるのが即ち其れである。²⁾

1) 拙著『唯物史觀研究』268頁

2) Wundt, Grundriss der Psychologie, 1898, S. 393.

グンテルは、この原理が、ヴァントに先立ち、マルクス及びエンゲルスによつて既に發見されたと言つてゐる。しかし如何なる思想でも、その淵源を尋ねるならば、吾々は其れから其れへと遡り得るのであつて、この原理についても亦た同様に、吾々はマルクスより遙に以前に、その主筆者を見出すことが出来る。私は嘗て、アダム・スミスの考の中にも、現代の經濟組織を以て長き期間に亙る自然的發達の結果と看做す思想が含まれて居り、さうして其れは取りも直さずマルクスの唯物史觀の根底に横たはつてゐる思想と同じものだ、といふことを、指摘して置いたが、茲に述べやうとするのは、それと同様の考が更にスミスの著書に先だつて、それよりも一層明白に且つ一般的に、既にファーガソン(Adam Ferguson)の著書に見はれてゐる、といふことである。

『アダム・ファーガソン(一七二三——一八一六年)は、アダム・スミスと同時代の人で且つ彼

れの友人であり、彼等の生時に於てはスミスに劣らず有名であつたところの、スコットランド人であるが、彼は、「諸國民の富」に於ける其等よりも吾々の目的にとつてもつと重要な意義をもつところの、社會哲學及び政治哲學に關する學說を展開してゐる。ヒュームの批判的精神及びモンテスキューの歴史的精神は、ファーガソンに於て最もアトラクティブに結合されてゐる。彼は當時に於ける佛蘭西思想家等の狂熱的アブゾリズムから全然離れてゐた。……彼は……社會及びその諸制度をば、最賢の哲學者達によつてさへ制御の見込なきところの *volving concerns* (進行中の事象) だとして、之を研究した。彼れの興味は、社會が何れの方向に動きつゝあつたかを歴史の光により研究するに在つたので、超人間的の智慧により之が進行を定めんとすることでは無かつた。……最も有力な彼れの論者は、一七六五年に公にされた *Essay on Civil Society* であつた。エディンバラ大學の教授としての彼れの講義を纏めたところの *Princi-*

8) 『近世經濟思想史論』16頁以下

4) 京都帝國大學の蔵書に據すれば、此書の初版は1767年に發行されてゐる。1765年は恐らく誤植であらう。

ples of Moral and Political Science (1792) は、前者に比べて系統的ではあるが、文體がアトラクティブでなかつた。社會的及び政治的發達を決定するところの、豫見されざる且つ意圖されざる諸要素に對する、フアーガスの力説は此等の著書に於て共に根本的であつた。アブリオリの學問の諸理に合はして諸制度を改鑄しやうといふやうな、佛蘭西の改革主義者の熱狂は、彼れの少しも持つてゐなかつたところである。彼れの考によれば、國家の起源、政策及び政治的秩序は、哲學者の思索とは全然關係を有たないところの、諸事情によつて決定されるものである⁵⁾。フアーガスの思想についてダニングは斯様に説明して居る。私は彼れの説明が間違つてゐないと云ふことを證明するために、フアーガスの原文から、注意すべき若干の文句を、次に譯載するであらう。

十分の意圖を以て爲された行爲から、全く意圖内に在らざりし副産的結果が生ずることに

ついて、フアーガスは明白に次の如く述べて居る。

『人類は、彼等の心の現在の感覺に従ふことに於て、不便を除去し又は直ぐ眼に見えてゐる便利 (apparent and contiguous advantage) を得んと努むることに於て、彼等の想像を以てするも豫見し得なかつたところの諸目的に達する、さうして他の動物と同じやうに、その目的を意識することなしに、彼等の天性に従うて過ぎ行く。』

斯様な認識は、當然に、社會諸制度の形成に對する人間の本能の働きを重視するの結論に導く。だから彼は更にいふ。

『一般に人間は、好んで目論見及び計畫々作ることにと耽るものである。けれども他の人々のために目論見又は計畫しやうとする人は、自分自身のために計畫するを好むところの各人のうちに、その反對者を見出すであらう。何處から來たか吾々には知れず、又何處へでも其の好む所に吹いて行くところの、あの風の

5) Dunning, A History of Political Theories from Rousseau to Spencer, 1920, pp. 15-6.
6) An Essay on the History of Civil Society, p. 186. (原本は 1814 年に第七版を發行してゐる、茲には總て私版による)

やうに、社會の諸形態は、不明瞭な且つ遠い起源から派生してゐる。其等は哲學が起つたよりもずつと以前に、人間の思索からでなしに、その本能から生れた。……』
彼は猶ほ言ふ。

『多衆の一々の歩み及び一々の運動は、開明の時代と稱される時代にでも、一樣なる將來に對する盲目を以て爲される。諸國民の有する諸制度は、人間の行爲（意識的行爲）の結果であるには相違ないが、しかし其れは、或る特定の人の設計を施行したものでは決してない。……社會は、何等の變化も企圖されてゐない場合に、最大の革命を起し得るものであり、又最も精練された政治家でも、自分等の施設により國家を何處へ導きつつあるかと云ふことは、必ずしも常に自覺してゐる譯ではない。』
此等の思想が、如何によく、唯物史觀の根底に横はつてゐる思想に酷似してゐるかは、エンゲルスの次ぎの言葉が之を證明す。彼は一八九〇年九月二十一日の日附ある書簡に於て、實

に次の如く述べてゐるのである。

『吾々は自分自身で吾々の歴史を作る、けれども、……終局の結果は常に多くの個人意志の衝突から生れ出ると云ふやうに、……歴史は作られて行く。無數の相互に交叉した諸々の力、力のバラレログラムの無限の群、此等よりして歴史的事件といふ一つの合成果が生れ出るが、それ自身は又、全體としては無意識的に且つ無意志に働くところの、一の力の生産物と看做され得る。何故といふに、各々の個人の意志せし所は、他の各々の者により妨げられ、かくて生じ來れるものは、何人も意志しなかつた所のものであるから。』
所謂『意識的行爲の無意識的結果』として、社會の進行は、何人の意識にも上ぼらざりし方向を探る、といふことが、唯物史觀の根本に横はる思想であるが、その思想は、マルクスやエンゲルスの説明に比べてさへ、なほ明確だと言つても可い程度に、スマスの『諸國民の富』より殆ど十年前に公にされ、フェアガスの著書のうち

7) p. 187.

8) Woltmann, Der historische Materialism, S. 240 に引用する所。（拙著『唯物史觀研究』189頁參照）

に記述されてあると云ふことは、私の聊か意外
とするとところである。

思ふに所謂Rationalismが、吾が經濟學者の
思索を過らしめたことは、既に久しい。殊に限
界效用説を主張する學者の或者にあつては、そ
の弊の特に甚しきを見る。けれども『現代の心
理學者は、人間性に關する科學的の定義を、既
に可なりの程度に革命して仕まつた。吾々は、吾
々の行爲に關する確な又透明な頭腦を以てする
制御の代りに、只、複雑な心理的生理的の諸機
構——時に本能と稱せらるゝもの——の群から
起るところの制御を有するに過ぎない、と思は
れる。その本能が行爲の發力裝置であり、同時
に又その方向の決定者である。この全體の行程
に於ける理性の持場は、舊式の常識的見解が想
像するよりも、遙に重要ならざるものである。』⁹⁾
私は學者が、この本能の持てる持場の重要さに
對し、之に値するだけの認識を爲すの必要を、
切に感じつゝある者である。恐らく其れは現代

の諸現象を觀察し、又將來に於ける社會の進行
を豫見するに際し、正しき理解を得るがため、
根本的に必要なことであらう。フアーガスンは
今、甦るべきである。

9) Tugwell, Human Nature in Economic Theory. (Journal of P. E. June, 1922.)